

(vol.8)

赤松加奈

奈良ゆかりのアーティスト
交流プログラム

真ん中と 端っこの わたしたち



奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム

なら歴史芸術文化村では、さまざまなアーティスト交流プログラムを実施しています。奈良ゆかりのアーティスト交流プログラムでは、奈良出身、在住または、奈良を拠点に活動するアーティストを招へいします。奈良に関わりをもつアーティストの表現活動には奈良の魅力、問題点などアーティストが独自の視点から捉えられた奈良が内在します。そして、アーティストそれぞれが追求するテーマや提起する問題に触れることは、自分自身や社会などに対して、新たな気づきを得ることにつながるでしょう。


本プログラムは、来村者が作品展示、公開制作、ワークショップなど、アーティストとじかに出会い、交流することを通して、奈良を再発見するとともに、「もっと作品を観てみよう」「自分も創ってみよう」と、アートを身近に感じ楽しむ機会の創造を目的としています。

奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム vol.8 について

vol.8 となる今回は、家業である農業の経験を通して自然の中にある生と死や、幼子との日々の中で生まれた感覚や経験を基に絵画作品を制作する、現代美術作家の赤松加奈さんを招へいしました。

赤松さんはこれまでアーティスト活動の傍ら、農業、子育て美術教師など様々な役割を背負ってきました。その役割がつかたり外れたりすることに対し、不安と自由になった身軽さが同時に存在する中で、もう一度自分自身を見つめ直すための機会として今回のプログラムは実施されました。

本プログラムでは、「じぶん」「いのち」「そだてる」の3つのキーワードを軸に、3名のアーティストをお招きし、作品展示、対談と手法を体験するトーク＆ワークを行いました。そして、他人の手が加わった作品を自分の作品と言えるのかという疑問から、参加者が赤松さんの作品に描いていくワークショップを行い、作家・鑑賞者の関係性を考えながら制作を進めてきました。約1ヶ月半の活動を通して、来村者やアーティスト同士の交流など多様な関わりが生まれ、立場や役割が入れ替わりながら人々がつながっていく様子が見受けられました。



初めての美術館での個展が終わって、約一年。

「子育てをして、仕事をして、農業をして、家事をして、絵を描く」という

それまでうまく循環していた構造がガラガラと音を立てて壊れてしまった。

あらゆる役割から外れてしまった私は、私そのものに戻ったような気がする。

足場を失った不安と、自由な身軽さを手に入れた私が今もう一度見つめてみたいこと。

「じぶん」とは？「いのち」とは？「そだてる」とは？

赤松加奈



「いのち」

奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム
（vol.4）赤松加奈
真ん中と
端っこの
わたしたち
2026.1.10 (土) - 2.23 (月・祝)



2026年1月10日(土)~2月23日(月・祝)
場所 | なら歴史芸術文化村 スタジオ 301・302



ワークショップ
「アーティストと一緒に山辺の道を描こう」

2026年1月17日(土)、31日(土)

①13:30~14:00②14:00~14:30③14:30~15:00

場所|なら歴史芸術文化村 スタジオ 301

他人の手が入った作品を自分の作品と言えるのか？そんな疑問から始まったワークショップ。作家である赤松さんは見るひとに。参加者は描くひとに。役割が混在する場にもなりました。



まさらだったキャンバスは、沢山の参加者の手によって赤松さんの予想以上に描かれていきました。



◀1日目のワークショップ後の絵

2日目のワークショップ後の絵▶

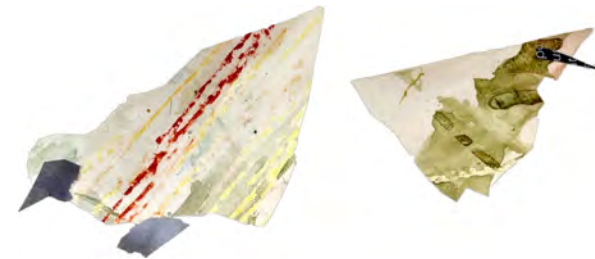




ワークショップで子どもたちが描いた上から更に赤松さんが描き足して制作を進めていきます。普段自分では描かないような表現に苦戦しながら、絵と向き合いました。



▲プログラム中に出来たコラージュ「柿の木」



▲プログラム中に出来たコラージュ「鳥骨鶏」

展示空間と制作場所が同一になった空間では、スタジオを訪れた沢山の人の交流がありました。展示を見にきた元教え子にキャンバス張りを手伝ってもらったり、スタジオを訪れた親子・文化村スタッフを招き、下地の為の色をキャンバスに塗ったり…また、写真作家の中古樹さんとの出会いでは、展示風景の写真を撮影していただくなど、赤松さんにとって新たな交流が生まれる機会となりました。今まで聖域化されていた赤松さんの制作場所・作品が開かれ沢山の人が携わる様子が見られました。



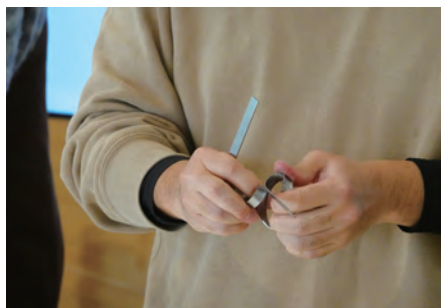


「じぶん」をめぐるトーク & ワーク

2026年2月7日(土) 13:30~15:00

場所|なら歴史芸術文化村 交流ラウンジ

道具を使わず手や体で鉄を曲げて作品制作を行う高松威さんを講師に招き、作品制作時の思いなど、お話を伺いながら一緒に鉄を曲げてみるワークを行い、制作者と鑑賞者の関係性を見つめました。



僕の作品は鉄を曲げて作る立体です。小さいものから大きいものまでありますが、基本的にはすべて手で曲げています。鉄は硬い素材なので、曲げるときには指や身体が痛くなりますし、思い通りの形にはなかなかなりません。むしろその「思い通りにならない」感じが制作の大事な部分になっています。鉄をぐっと曲げて戻したときには、もう元には戻らない癖が残る。その一発勝負のような状態の中で形が止まり、それを作品として成立させています。

制作ではまず鉄を曲げながらパーツをいくつも作り、それらを壁に並べて俯瞰して見て、その中から使える形を選び、溶接して組み上げます。最初から完成形があるわけではなく、手を動かしていく中で形が展開していく感じです。立たせてみて「立ったな」と思ったら、それで一つの作品になります。

僕の中にはいくつか造形の癖のようなものがあって、その誤差をどう広げていくかを試しながら制作しています。鉄という素材の硬さや抵抗とやり取りしながら、形がどこで止まるのかを見つけていくような制作方法です。—高松威

高松さんの作品を最初に見たとき、身体の動きがそのまま鉄に写し取られているような制作なのかなと思っていました。でもお話を聞くと、鉄との関係の中で形が決まっていく制作なのではないかと感じました。手の痛みや素材の硬さによって「ここまでしか曲がらない」という制約が生まれ、その中で形が決まっていく。自分が完全にコントロールするというより、素材とのやり取りの中で形が生まれているように思いました。—赤松加奈

※トークより抜粋・再構成

高松威 Takamatsu Takeshi 鉄立体作家

1997年大阪府生まれ。大阪芸術大学大学院芸術研究科芸術制作専攻博士課程前期(芸工)修了。在学中より鉄を中心とした作品を発表してきた。卒業後は鉄を手で曲げて立体にするシリーズを継続して発表している。また作家の実験的な表現の場を自主的に作るグループ「表層」を卒業時に立ち上げ、制作、発表、観客の関係性を探る。ランシエールの分有のように境界を組み替え、制度や資本からこぼれ落ちる営為を肯定するように制作している。





「いのち」をめぐるトーク & ワーク

2026年2月14日(土) 13:30~15:00

場所|なら歴史芸術文化村 交流ラウンジ

制作と並行して狩猟、養蜂、教育活動など幅広く活動している井上亜美さんを講師に招き、それぞれの暮らしから生まれた食材を食べながら循環する暮らしと制作について対談し、「いのち」について考えました。



▲奈良市のパン屋にある、天理の小麦粉で作られたパンを使用しました。



制作は、私にとって唯一、一人になれる時間です。狩猟も一人でやっているように見えるかもしれませんが、実際には多くの人と関わる活動です。普段は人に囲まれていることが多いので、制作の時間は自分の感覚を取り戻す瞑想のような時間になっているのかもしれませんが。特別うまくバランスが取れているわけではなく、その場その場でやっている感覚です。違和感がきっかけで制作が始まることは多くあります。制作を通して、その違和感を一度自分の手の感覚に戻しているような感覚があります。答えを出すというよりも、揺らぎの中でそれを見つめ続けている状態に近いのかもしれません。狩猟は、命と直接向き合おう行為でもあります。最近は熊の駆除などに対して「かわいそう」という声が上がることがありますが、当事者ではない立場からの意見も多いと感じます。まずは正しい知識を知ること、あるいは実際に体験してみることが大事なのではないかと思います。自分ごととして命の問題を考えることが必要なのかもしれません。一井上亜美

以前は、絵というものは自分一人で0から100までつくるものだと思っていました。けれど子どもが生まれてから、制作中の絵の中に子どもが描き込んでくることもあります。そうした状態のものを個人の作品として発表できるのかどうかということが、これからの一つのテーマになりそうです。子どもから新しい問いをもらっている感覚があります。制作と農業、そして教員の仕事を歩き来しながら、関係性の中で物事が成り立っていることを強く感じるようになりました。クラスという小さな社会でも、さまざまな人が関わり合うことで雰囲気生まれます。農業でも、生や死を含めた多くのものがバランスを取りながら風景をつくっています。色や形、質感が関係し合って画面が成立する絵画の構造と、どこか似ていると感じました。農業はそうしたことを考える上で大切なモチーフでしたが、今はもう少し俯瞰して、さまざまなものの関係性を見ようとしている段階にいる気がしています。また、教員を12年ほど続ける中で、人との関係も循環していくものだと感じるようになりました。そうした循環の感覚も、これから作品の中に現れてくるかもしれません。一赤松加奈

※トークより抜粋・再構成

井上亜美 Inoue Ami

現代アーティスト

1991年宮城県生まれ。京都造形芸術大学子ども芸術学科卒業。

2016年東京藝術大学大学院映像研究科修士課程修了。日常的に猟犬や養蜂などの生き物と触れ合うなかで、彼らとの関係性、その距離感をエスノグラフィックな視点で捉え、写真や映像、インスタレーションなどの手法で表現する。





「そだてる」をめぐるトーク & ワーク

2026年2月21日(土) 13:30~15:00

場所|なら歴史芸術文化村 交流ラウンジ

精力的な制作発表だけでなく、長年教育にも携わってこられた山部泰司さんを講師に招き、参加者全員でひとつのキャンバスに絵を描くワークを行い、絵を描くこと、育てること、そして生きることについて見つめてみました。



赤松さんは子どもをアートで育てようって意識が強いと思うんですよ。僕も幼児教育学科で長いこと授業やってきて、子どもの想像力をどう引き出すかっていうのをずっと考えてきました。だから今企画の絵も育てる、関係性も育てる、というテーマに相づちをうつのは僕がいいかな、と。僕がやっていた研究所の話で言うと、他の画塾で断られてくる子がいる。断られて諦める子もいる。でも、あそこで教えてみたいやから、とりあえず行ってみようっていうエネルギーを買う。受験3ヶ月前の子たちも「いいよ、おいでおいで」で受け入れてきた。「下手

でもまず入るうよでも入った後は自分が描きたいって思わないと続かないけどね」って感じて。「思い切り筆でパーツとやっちゃえ」とか、表現的にやらせることを勧めたりしてました。そういうところがモチベーションだった。授業では置き去りにされている子を見つけて声をかけるとか、+αのびっくりさせることとか、そういうことをしてきた。今回の作品は、農法の天地返しにヒントを得て描いてます。土を掘って上下を入れ替える作業をしながら、社会や人に対する深い怒りも込める。

若い頃の僕は、世界の美術史って経済の中心と結びついて、政治や経済の中心が歴史を書く権利を持つてると思ってた。でも関西には関西の美術史がある。日本には日本の美術史がある。自分の歴史美術を誠実に作れば、規模や力は違っても、端っこ私たちも真ん中の私たちと同時にいることができるんちゃうかって思って、その思いと今回のタイトルがぴったり符号していた。もっと言うと、個人の中にある美術史も世界の美術史と同じくらい価値がある。この個人の中にある美術史と世界の美術史って、自分の中でこれ同じ値打ちだよって。この視点は、幼児教育学科に来てなかったらなかったなと。—山部泰司

山部さんの話を聞いて、やっぱり「個として響き合う」ってことがすごく大事だなと思いました。私が教えている時も日々のやり取りを大事にしています。出来上がるものより、その過程が面白い、私自身も楽しい。今回の展示でいう「真ん中の私」と「端っこの私」は、いろんな役割がついたり外れたりする中で自分の中に出てきた考え方です。いつも怒ってる自分もいるけど、その怒りが構造を強めてしまうんじゃないかとも思ったりして。ふと私は真ん中にも端っこにも存在していると感じました。多様性の時代でそれぞれの真ん中や端っこは違って、一対一で響き合える瞬間がある。今回の展示を通して、いろんな役割を演じながらも、自分が絵描きとしてしっかり立てる自信がちょっとついたな、という感じです。—赤松加奈

※トークより抜粋・再構成

山部 泰司 Yamabe Yasushi

画家

1958年岡山県生まれ。現在京都府及び京丹波町に拠点。京都市立大学大学院美術研究科修士。レオナルド・ダヴィンチの嵐や洪水のデッサンや董源、李成の山水画を結びつける視点から着想を得て、記憶と現実、現在と過去、東洋と西洋など、その対立構造ではとらえられないものをさまざまな自然の気象、風や波、樹々をモチーフに描く。農地を更新するために地層の上の土と下の土を入れ替える「天地返し」を試みている。



アーティストトーク 赤松加奈 × 山本雅美 (奈良県立美術館 学芸課長)

2026年2月23日(月・祝)

場所|なら歴史芸術文化村 交流ラウンジ

今回のプログラムを赤松さん、山本雅美さんとともに振り返りました。

I 交流プログラムについて

昨年、奈良県立美術館のギャラリーにて大学院を修了して10年の振り返りをするような個展を開催しました。その後、家族のそれぞれのライフステージの変化により、それまでモチーフにもなっていた農業を辞めることになりました。この数年、出産を機に母になり、家庭でも職場でも、さまざまな役割に変化がありました。さらに農業をやめることによって農家の奥さんでもなくなり、自分の立ち位置が揺らいでしまいました。作家として自由になり身軽になったという喜びもあるはずなのに、不安感から新しい役割をすぐに得て安心したいという気持ちもどこがありました。そのようなタイミングで、この機会をいただき、さまざまな役割の中にいる私たちが、自分の在り方を俯瞰して見つめ直す試みとして企画しました。

今回の交流プログラムでは何人かのアーティストと何かできないかという発想から、いくつかワークショップをやるということ、プログラム全体として組み立てていきました。数年前から、ある3人の作家が私にとって重要な存在になるのではないかと気になっていました。交流プログラムという機会にぜひその3人と何かやりたいと考えました。

奈良県立美術館での個展を一つの区切りとし、その発展として今回「他人の手を入れる」という試みを本格的に始めました。きっかけは子どもの誕生により生活の全てに子どもが介在する世界になったことです。美術館で発表した作品にも、子どもの視点と私の視点それぞれから見た散歩道の一つの画面に描いた作品を出しました。それぞれの視点を重ねて描くことで、体感した景色そのものを表現できるのではないかと試みでした。今回はその試みを娘だけでなく、もう少し広くやってみようと思いました。また、2024年に東京の中野区役所で作品展示とワークショップを行った際にも、子どもたちに私の描きかけの絵に直接描き入れてもらう試みをしました。その頃から、これは自分の作品になり得るのだろうかという問いが生まれていました。

II 新作「山辺の道」について

今回は「他人の手が入っても、それは自分の絵と言えるのか」という問いをテーマに制作しました。制作はキャンバス張りから始め、2回のワークショップを行いました。最初はまっさらなキャンバスに子どもたちが描き、その後に私が手を入れ、さらにもう一度参加者に描き加えてもらう。最後に私が再び描き込み、作品として仕上げるといった流れです。キャンバスを張る段階でも、たまたま見に来た元教え子に急遽手伝ってもらったなど、予定以上に多くの人の手が加わる形で制作が進みました。

作品のテーマは「山辺の道」です。事前に道を歩いて多くの写真を撮り、その中から気になった要素を取り出してコラージュするという、普段の制作方法をベースにしています。さまざまな角度から見た場所の要素を一つの画面に集め、絵画の空間をつくるやり方です。ワークショップでは、そのプロセスを追体験してもらう形をとりました。撮ってきた写真を並べ、そこから気になる色や形を選び、



紙に書き出してもらい、その色を画面に描いてもらいました。みかんや竹など具体的なものを描く子もいて、11歳くらいの子はかなりしっかり描いてくれていました。しかし4,5歳くらいの子もたちはだんだんと競い合うようになり、「私が、私が」という感じで、画面はぐちゃぐちゃになっていきました。私はそれを呆然と立ち尽くして見ていて、その様子が写真にも残っています。

ワークショップのあと、「このあと結構消すからね。私の作品になるから、また見に来てね。もし消えていても、私がつよい大物になったら100年後に赤外線で見えるかも」と冗談を言いながら、実際にはパールの下地で多くを消していきました。その作業をしているとき、先生や親の目線では残してあげたい線も多くありましたが、今回はこの絵を自分の作品として成立させたいと決めていたので、作家の目線で選択していきました。子どもたちが描いた線や色を活かすか消すかを判断していく作業は、かなり苦痛でした。その感覚は、どこか子育てのストレスにも似ている気がしました。

大学で学んできた絵画というものは、もっと洗練されていて、制作だけに集中する世界でした。線一本をどう配置するか、どう描くかを徹底的に追求してきました。でも今の自分の生活はそれとは大きくかけ離れています。そこで今回は、これまでタブーだった「他人の手を入れる」ということを試してみました。ただ、やはり自分の中には、「絵画とはこういうものだ」という感覚が強く残っています。その絵画を成立させるためには、どうしても消さなければならない部分がたくさん出てきます。先生の目線なら絶対に消せないものでも、作家の目線で見れば消さざるを得ない。そのとき私は、作家としてのわがままを自分に許可しているのだと思いました。悪者になることを許可する、という感覚です。違う役割ではタブーになることでも、作家という役割なら許される。そこを今回強く感じました。結果として、完璧な作品ができたかと言われると、もっとこうすればよかったと思う部分もあります。でも、それでもこれは自分の作品だと言えるのではないかと考えています。作家として判断し、描き、選択することで成立させた作品だからです。また、このプログラムを通して、これまで無意識に切り替えていた役割を、自覚的に意識するようになったと感じています。



III トーク & ワークについて

3人の方それぞれにテーマを作りました。それは自分が今までも携わってきたこと、そして今後、役割が変化していても携わり続けていくことを選びました。それが「じぶん」と「いのち」と「そだてる」の3つのテーマでした。

「じぶん」—高松さんと鉄

高松さんは「じぶん」の部分です。彼とは以前に別の企画で出会いました。そこで見た作品がとても良かった。体だけで鉄を曲げる作家で、その行為に強く惹かれましたが、話をするほどに理解しきれない部分の多さも感じていました。そこで今回の「じぶん」というテーマの中で、私が自分の絵の中に他人に手を加えてもらうのと同じように、自分の領域に人が入ってくるということを高松さんにも体験してもらいました。私が制作者ではなく鑑賞者の立場で、高松さんの作品と作家本人に向き合ってみたくらい、この企画にお招きしました。そして、ワークショップでは高松さんの一番身近な素材である鉄をみんなで曲げてみました。はじめは、体の動きをぶつけ、その痕跡を残す行為なのだと思っていました。しかし実際に体験してみると、むしろ鉄の硬さに自分の動きを止められ、完全にコントロールするというより、素材とのやり取りの中で形が生まれているように思いました。高松さんとのワークを体験し、さらに自分が「山辺の道」を描きながら気づいてきたことがありました。私が農業風景に惹かれてきたのは、生も死も人工物も自然物もすべてが同時に存在し、人が手を入れられる部分とそうでない部分が混ざり合いながら景色をつくっているところなんです。あらゆる風景がそうであるのに、自分の絵の中だけはすべてをコントロールしようとしていることに違和感を覚えました。目の前に広がる様々な要素がバランスをとりながら目の前にあり続けるそのものを描くのだったら、ここにもそれを入れるべきだろうと思い、他人の手を入れてみたのですが、実際にやってみて高松さんが言うてる、自分を止めてくれる鉄の硬さというものと同じものなのかなという気がしました。



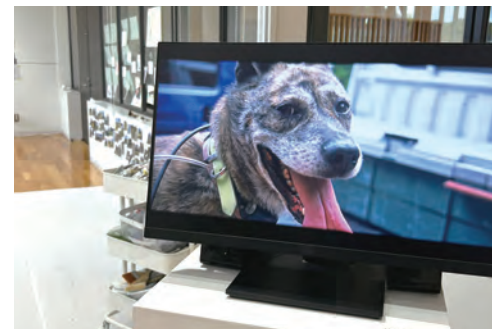
《ハンドメイド・コンポジション13》2025年鉄



「いのち」—井上さんと違和感

井上さんは大学の後輩です。在学中は面識がなかったのですが、卒業後に共通の恩師の紹介で知り合いました。昨夏、長野の康耀堂美術館で京都芸

術大学(旧:京都造形芸術大学)の卒業制作選抜展に卒業生として参加した際、初めてご一緒し、そのときに初めてアトリエを訪ねました。彼女は狩猟や養蜂をしながら作品制作をしていて、私は農業を10年ぐらいしながら制作をしていました。生活と制作が地続きだという部分や、命と向き合いながら制作をするスタイルなどにも共通点を感じ、一緒に展示するだけではなくもう少し深く掘り下げたくなり、お招きしました。



《まなざしをさす》2017年映像

今回の展示作品は井上さんが狩猟をする上で感じた違和感を映像化したものです。鹿を撃つと報奨金が出ますが、お腹の中の胎児は一頭として数えられない。同じ命のはずなのに扱いが違う。その違和感が映像に表れています。私はそれに合わせて、身近な風景の中のキラッと輝く部分と、その傍らでネズミが死んでいるというような目の前にあるそのままの景色を描いた作品を展示しました。またトーク&ワークでは井上さんの鹿のレバーパテと私の家族が作っている苺を食べながらみんなで話しました。様々な生も死もある上で苺やお肉を食べているという実感を、ぜひ参加者の方にも体験してほしいと思って、食べながら見ることにしました。トークの中では大学の校舎内で鹿の肉をさばいて塩釜焼きを作るまでを映像にした作品などを鑑賞し、井上さんの考えや作品についての話を聞きながら鹿のパテを食べるという体験を共有しました。私自身も少しドキッとしながら、それをいただく体験を参加者の皆さんと共有しました。井上さんは、日々の生活と表現がとても静かにつながり、自分の手応えを感じられる場所に立ちながら表現を続けている。私自身も、農業をしていた頃はそういう感覚に近いところにいたのだと思います。農業は私にとってとても強いモチーフでした。ただ、井上さんが「狩猟の作家と言われるのは嫌だ」とおっしゃっていたように、私も「農業の作家」と言われることには少し違和感がありました。今は状況が少し変わってきていて、自分の中の農業の存在感は少し薄れてきた感覚があります。そうすると、モチーフとしての農業は少し遠ざかっていくのですが、逆にテーマとして考えてきたことはあまり薄れていないと感じました。自分の中の物語が強く結びついたモチーフから少し距離を取ることで、別の場所や別の風景も描



けるようになってきました。実際に、今年描いた《夏のあさ、鶏の声》という作品では、これまで自分とほとんど関わりのなかった場所をモチーフにしました。そこには個人的な物語があまり結びついていないので、少し俯瞰した感覚で描くことができました。テーマは変わっていませんが、絵画とは何かというコンセプトへの意識は以前より強くなったように思います。

また、井上さんの最近の作品で蜜蜂から見た世界はこう見えているのではないかという視点で映像化された作品もありました。そこで井上さんとは、読んでいる本が偶然同じだったということもありました。ユクスキュル・クリサート(著)『生物から見た世界』という本なのですが、私もとても好きな本です。そこにも通じるのですが、今回感じたのは、私たち二人とも、いろいろな価値観や役割にとらわれずに、できるだけフラットに目の前の世界を見たいと思って制作しているのではないかということでした。

一「そだてる」一山部さんと教育



左:《天地樹勢》2025年 アクリル絵具、カンヴァス
右:《光輝雲流》2026年 アクリル絵具、カンヴァス

京都で展示を見に行くと、どこに行ってもふらっと山部さんが現れるという出会いがきっかけでした。最初は「農業しているの?」と声をかけられたことから会話が始まり、私が農業をしながら絵を描いていると言うと「僕もやねん。」と言われて、農業をしながら絵を描くおじさん、という印象で関係が始まりました。後から先生であることも知りましたが、私の展示やワークショップに来てくださったたり、私が面白いと思っているポイントをきちんと拾って「おもしろかった」と言ってくださる視点が嬉しく、もっと話を聞いてみたいと思いました。その後調べる中で、山部さんが華頂短期大学の幼児教育学科の教授を長く務められていたことや、兵庫県立美術館で見た大きな花の絵が山部さんの作品だったことを知りました。最近の作風との違いにも驚きました。農業をされていることも含め、教育や農業など「育てる」ことに関わり続けている方なのではないかと感じました。私自身も教育や農業が好きで続けてきたので、そこに共通するものを感じました。

さらに、山部さんがかつて主宰されていた「マキノ美術研究所」の同窓会展を見に行ったら、作品について語る映像の中で、農業の「天地返し」という農法から着想を得て制作しているという話を聞きました。上の疲れた土と下の豊かな土を入れ替えるように、絵の中でも上下を入れ替えるという発想で作品を制作していると聞き、農業の経験が直接作品の発想につながっていることに強く共鳴しました。しかも今まさに新しい試みとして制作されている作品だと知り、この作品をぜひ展示したいと思いました。展示は完成した状態ではなく、真っ白な会場で設営の段階から公開する形で行いました。山部さんに作品を持ってきていただき、展示するときに「この絵はどちらが上ですか?」と聞くと、「どっちやと思う?」と言われました。私がこちらだと思うと言うと、「ほんまは反対やけど、こっちにしようか」と言われ、結果的にその場で天地が逆になった状態で展示されることになりました。今回は山部さんも私に合わせて教育者のモードとしてお話いただいた感じがありました。打ち合わせのときから話題に出てたのが、学校などでやる授業はプログラムをしっかりと立

てて、それをクリアしないといけない、それで成績をつけないといけないというような、仕方がないところでもあるんですけどちょっとそこを破りたいよねっていうような話を一緒にしていました。今回のトーク & ワークでは、大きなキャンバスを広げ、みんなで絵を描き、最後に木に張り込んで持ち帰るという簡単なプログラムだけ決めました。あとは山部さんにお任せして、プログラムを超えて何か面白いことが起きる場にできればと思っていました。実際のワークではキャンバスを広げ、「僕も描くからみんなも描こう」と言って、そこにみんなで絵を描き始めました。トークを聞いただけだと思って来てくださった方の中には、きれいな服の方もいましたが、「靴下を脱いだ方がいいですよ」と声をかけて参加してもらいました。皆さん遠慮されていたので、私も率先して靴下を脱ぎ、子どもの一人のような気持ちで一緒に描かせてもらいました。



このワークを通して「こうしなければいけない」という感覚を取っ払えるというような面白さになったらいいなと思いました。最終的に「どんな結果も結局糧にしているな」と感じてもらえたら嬉しい、というようなことも考えていました。

実際にトークをしてみて、私が絵を通して「育てる」ことに関わる中で目指しているものに、一番近いことをされている方なのだと感じました。その答え合わせと、少し迷いがあった部分を、肯定してもらえた感じがしました。

IV おわりに | 自分に戻れる場所としての表現

ワークショップを重ねるうちに、私の考えを実現するためには、よりコントロールできない他人の存在が必要なのではないかと思うようになりました。プログラム内で準備してその気持ちで来た人たちに、今からやりますよと言うよりも、関係性ができてきた中から自然と描く流れになるということができたら素晴らしいなと。期間中はできるだけ滞在するようにして、すべての交流を受け入れるということを自分の中の目標として掲げていました。すると、「絵が好きなんですよ」っていう親子が来て、ずっといる。その親子に、「もしよかったら今度自分の画材とかも持ってきて、私が描いている横で描いててもいいよ」と言ってたら、結局3回来たんです。お父さんも会社を早く退社してきてくれて。その2回目の時にやっぱり来てくれたと思って、キャンバスをパーッと広げてゲリラ的に描いたんです。でもお父さんと娘さんと私だけで描くには大きいし、生徒と先生みたいな立ち位置になるのが嫌だなと思ってたので、隣で仕事をされているスタッフの方たちをみんな呼び込んで、「スタッフなんで」と遠慮された方も「絵の前では関係ないんで描いてください」と言って一緒に描きま

した。本当はあまり使われたくないラメの絵の具とかブチュって出されるのも、「いいんだ、これが私の作品になるんだから。」と試してみたりして、それを終わってから次の日にパネルに張り込んで作品にしていきました。意図せぬものが自分の領域に入ってくるという、コントロールできない状態のイメージとしては、近づけたかなと思っています。

また、このプログラムのタイトルを「真ん中と端っこの私たち」としたのは、様々な役割を私たちは自分で選べるわけでもなく、端っこのときも真ん中のときもあって、私たちはそれに振り回されているのではないかと感じたからです。私自身、様々な役割を降りることになり足場をなくしたような状態からこのプログラムは始まりました。でも描いていくうちに思ったのは、役割というのはそのときに果たせればいいのだということでした。ただ、その元に戻ったときに何者であるかがわからなくなってしまうと迷ってしまう。あらゆる役割の中で自分に戻る手法として作家であることがあるのだと気づきました。俯瞰して物を見られる作家という立場に戻る。その場所があることで、いろんな役割もこなしていけそうな感じがしました。

また、多様性の時代と言われるように、同じ立場の人はほとんどいません。この部分は話が合うけどこの部分では分かり合えない。当たり前なんですけど、それがすごくやっぱり顕著な気がして、そういう私たちが、大きな構造の中での立ち位置とどう向き合えばいいのかと考えたときに、ニュートラルな状態で自分の軸を持って状況に応じて役割を引き受けていく。そのような在り方が、役割に押しつぶされず自分であり続ける方法なのではないかと感じました。

今回のプログラムではもう一つ、「循環」ということを強く感じました。循環するものだろうなと今までも思ってきましたが、今回それがだんだん現実になってきました。立ち位置や役割が入れ替わる、でもそれで新しくつながっていくということを実感して、これがやりたかったってことにちょっと触れられた。今までは「農業」という言葉でそれを表現してきましたが、農業という言葉を取り払っても私の中に残るものはこれなのかなと感じています。

※アーティストトークより抜粋・再構成



奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム vol.8 赤松加奈

企画 山本雅美（奈良県立美術館学芸課長）

担当 中筋みなみ（なら歴史芸術文化村）

主催 なら歴史芸術文化村

.....
奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム ドキュメント 2026

執筆 | 赤松加奈

編集 | 中筋みなみ（なら歴史芸術文化村）

写真提供 | 中古樹 p.2、p.3-4、p.21

タイトルロゴデザイン | 竹内敦子（XS）

発行 | なら歴史芸術文化村

〒632-0032 奈良県天理市杣之内町 437-3

発行日 | 2026年3月

無断転載・複製禁止



赤松加奈 Akamatsu Kana

1990年 奈良県生まれ

2015年 京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻ペインティング領域 修了

主な個展

- 2025年「こんにちは、 」(奈良県立美術館ギャラリー / 奈良)
「虫の目とおやの目」(ギャラリーヒルゲート / 京都)
- 2023年「土の声を聞き、風とあそぶ」(NEUTRAL / 京都)
- 2021年「みんなの部屋」(喜多美術館 / 奈良)
「ここで描く」(galerie16 / 京都)
- 2019年「赤松加奈 個展」(フォルテック一級建築士事務所 / 東京)
「新世代への視点 2019年赤松加奈展」(コバヤシ画廊 / 東京)
- 2018年「真夏の窓辺」(フォルテック一級建築士事務所 / 東京)
- 2015年「KANA AKAMATSU」(galerie16 / 京都)

主なグループ展

- 2025年「Oh Deer」(南城美術館 / 沖縄)
「はじまりの部屋 - 京都芸術大学 2024年度卒業制作セレクト展 -」(康耀堂美術館 / 長野)
「CAPS : Contemporary Art Practice | Studio-CAPS 2025 展」(高島屋大阪店 / 大阪)
- 2024年「idemitsu Art Award アーティスト・セレクション 2024」(国立新美術館 / 東京)
「東京都展 The Echoes of East Kyoto」(WHAT CAFFE / 東京)
「テーブルにトマト羽部ちひろ + 赤松加奈」(A-LAB / 兵庫)
- 2022年「テラスアート湘南 2022」(テラスモール湘南 / 神奈川)
「奈良・町屋の芸術祭 HANARART 2022 こあ」「今から、生まれる」(旧荒木邸 / 奈良)
「ARTISTS' FAIR KYOTO 2022」(京都)
- 2019年「群馬青年ビエンナーレ 2019」(群馬県立近代美術館 / 群馬)
- 2016年「若いクリエイターによる合同展示」(The Terminal KYOTO / 京都)
- 2013年「はじまりの部屋」(康耀堂美術館 / 長野)

入選・受賞

- 2026年 Kyoto Art for Tomorrow 2026- 京都新鋭選抜展 - 日本経済新聞京都支社賞
- 2024年 Kyoto Art for Tomorrow 2024- 京都新鋭選抜展 - 入選
- 2019年 群馬青年ビエンナーレ 2019 大賞
- 2018年 FACE2018 損保ジャパン日本興亜美術賞 審査員特別賞
シェル美術賞 2018 入選
- 2014年 ワンダーシート 2014年 入選

パブリックコレクション

- 群馬県立近代美術館 (群馬)
- 東京 D タワーホスピタル (東京)
- 中野区 (東京)

